

地銀協レポート

vol. 14

2024.9.18

report1.

AI活用

report2.

女性活躍



A I と共に進化する地方銀行の姿	2
女性の活躍の場を広げる地方銀行の取り組み ～もっと女性行員が挑戦できる環境へ～	7
協会ニュース	13
ー 「地方創生事例集」に記事を追加しました	
ー 地方銀行における「地域密着型金融」に関する取り組み状況を公表しました	
<Pick up!> 日本太陽エネルギー学会で講演をしてきました	14
国税も！地方税も！いつでもどこでも簡単納付！	15



Cover photo — No.005

足利銀行 黒羽支店

栃木県大田原市黒羽向町32

元禄2（1689）年、松尾芭蕉は弟子の曾良を連れ、「おくのほそ道」の旅に出ました。江戸を出発して東北から北陸を回り岐阜県の大垣まで、およそ5か月をかけて巡り、行く先々で今も伝わる名句を残しています。この旅の中で、彼らが最も長く滞在したというのが、栃木県の黒羽です。ほかの地への滞在がおおむね1～3日であったのに対し、黒羽にはなんと13泊もしたそうです。

そんな黒羽には、みなさんにぜひ紹介したいスポットがあります。足利銀行の黒羽支店です。明治末期に建設された全国的にも現存が珍しい土蔵造りの銀行で、今も当時の趣をそのまま残す重厚な雰囲気が、通りかかる人の目を引きまします。“再現することが容易でないもの”として国の登録有形文化財にも登録されています。

歴史ある外観とは対照に、リフォーム済みの店内は広く明るく現代的。店舗機能も進化しており、2022年には、お客さま自身で操作するコピーATMや店頭タブレット端末を導入してスムーズかつスピーディーな手続きを可能としたファストランチ店舗（キャッシュレス店舗）となっています。

歴史がありながら最先端、それが黒羽支店です。現代の黒羽を芭蕉が訪れたら、この黒羽支店を句に詠んでいたかもしれませんね。



①足利銀行 黒羽支店外観。②正面出入口。見た目はレトロですが実は自動ドア。③看板も雰囲気に合うような黒茶色に。④黒羽支店の店内。ソーシャルディスタンスの時代には、同行公式キャラクターのバスカル&ファミリーが待合イスに座っていました。※写真はすべて足利銀行提供。